

●春日部市民文化講座（第 15 回） 「千利休のもてなしの心 ～戦国武将はなぜ茶の湯に熱心だったのか
第 5 回 古田織部の茶の湯と山上宗二の茶の湯」

◆日時：2015 年 3 月 25 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■利休さんの心を最初に捕らえた山上宗二

今日の講座は「古田織部の茶の湯と山上宗二の茶の湯」で山上宗二を入れたのですね。このタイトルを考えたのが 1 年以上前のことで入れたのですが、実は山上宗二をコンパクトに話すということは非常に難しいのです。山上宗二をひと言で言うと、利休さんの心を最初に捕らえたお弟子さんだと言って良いと思います。山上宗二が好きだった利休さんというのは、禅宗と深く関わっていた頃の利休さんでして、山上宗二という人は禅宗の中の茶の湯から出ることが出来なかったのですね。その後、宗二は秀吉の勘気に触れて利休さんからも離れ、小田原北条氏の茶の湯の師匠となります。その北条を攻めるために秀吉が軍勢を挙げ、利休さんや織部も一緒に北条攻めにやって来るのです。そこで、宗二と出会った利休さんは、秀吉との間に入って許しを請う茶会をするのですが、宗二が秀吉に楯突いて殺されてしまうのです。彼は鼻をもがれ耳を削がれて惨殺されるのです。そうして死んでいった山上宗二なのですが、死ぬ間際まで利休さんは宗二が自分の心を継いでくれているんだという熱い思いだけは持っていたのだと思います。山上宗二とは、そういう人なのです。

■古田織部の茶の湯

今日の私のお話は『織部とはいったい誰か』ということです。織部というのはとても不思議な人です。その不思議な人について学ぶ訳ですが、ここに並べてあるのは織部に関する参考資料です。それでは年譜を見ていきましょう。まず、織部が生まれたのは、1544 年、天文 13 年です。この時、織田信長はまだ 11 歳です。織部は岐阜県で生まれています。実は織部というのは岐阜県で生まれて地域に影響力を持っているのですが、この家系については全く分かりません。

- ◇1568 年、信長が足利義昭を奉じて入洛するときに織部も伴われています。ですから、この頃には織部が信長の近くにいたことになります。
- ◇1569 年に織部は信長の口ききで摂津・茨木城主の中川瀬兵衛(清秀)の妹・せんと結婚します。この“せん”は年譜の最後の 1629 年、寛永 6 年、織部妻・青霄韻(せいしゅういん) 72 歳で没すとありますように、織部が切腹した時には殺されていなかったのです。
- ◇1570 年、千利休が 49 歳で信長の茶頭として召し出されます。
- ◇1576 年に安土城ができます。織部 33 歳ですね。
- ◇1577 年、織部 34 歳の頃に現在の多治見市近辺に焼き物の窯がポツポツと出来ていきます。
- ◇1578 年、織部 35 歳の時に茨木城主となっていた荒木村重が謀反を起こします。荒木村重は、相当な文化人で、当時の第一人者と言っていいくらいの人です。村重の家臣・右近は剃髪し死に装束を着て信長に降伏します。
- ◇1581 年、織部 38 歳の時に、正式に千利休に弟子入りします。これは信長の許しがあったからです。
- ◇1582 年に本能寺の変が起こります。実は、この頃から利休の“わび茶”は深まります。その年の山崎の戦いの時に、国宝の「待庵」が完成します。この頃、右近は高槻城の城主だったのですね。千利休が二畳の茶室を造る時に、高山右近に木材の目利きを委ねているのです。
- ◇1583 年の賤ヶ岳の戦いは非常に激しい戦いでしたが、織部は 40 歳で参戦して、柴田勝家を破ります。
- ◇1585 年、織部 42 歳の時に、秀吉が関白となり、織部も織部正(従五位下)の官位をいただき、3 万 5 千石の大名となります。
- ◇1587 年 9 月、京に聚楽亭が完成します。その前に、全軍が島津征伐のために九州に出て行ったとき、筑前箱崎において 7 月バテレン追放令が出されます。高槻城主の高山右近は、大名を捨て秀吉の下を離れます。
- ◇1590 年、小豆島の対岸に室津という所があり、小西行長が代官も継いでいたのですが、秀吉の下を逃れた高山右近がかくまわれます。オルガンチーノなどの宣教師が来てバテレン追放令に対してどうするかという会議をします。、ローマ教皇に謁見した天正遣欧使節団(1582～1590)を宣教師バリニャーノが引き連れて帰って来たのです。
- ◇1591 年、千利休が自刃します。淀川を下る利休を織部と細川忠興が見送り、助命嘆願に奔走します。
- ◇1592 年に秀吉が朝鮮半島に出兵します。そして 2 回にわたって朝鮮の人たちを攻めます。
- ◇1597 年、小堀遠州 18 歳の時に、記録によると織部の弟子入りをしています。
- ◇1598 年に秀吉が 63 歳で亡くなります。その時に、織部は隠居します。



- ◇1603 年に菩提寺「興聖寺(こうしょうじ)」を建立してお金を出すのです。
- ◇1607 年、織部は織田有楽斎とともに大阪城で茶の湯を催します。
- ◇1610 年、織部 67 歳、将軍・秀忠に台子茶の湯を伝授し、将軍の茶道指南役になります。
- ◇1614 年、織部 71 歳、方広寺の鐘銘事件がおき、その清韓和尚を招いた茶会を催したことで家康の逆鱗に触れる。
- ◇1615 年、大坂夏の陣、織部の茶堂・木村宗喜等が放火の罪で逮捕され、織部に及ぶ。織部が切腹がします。

■織部の「ヒヅミ茶碗」

秀吉が亡くなる頃から古田織部の「ヒヅミ茶碗」が現れるのです。織部の茶会に「セト茶碗ヒヅミ候也」という言葉が『神屋宗湛日記』に出てきます。いわゆる歪んだ、ひょうげた茶碗を使用するようになります。特に秀吉が亡くなった翌年、利休さんの命日に歪んだ茶碗を用いて忍ぶ茶会を開いているのです。そして織部は、その命日の 1 週間に吉野の花見茶会をしています。これは『松屋会記』というに出ているのですが、彼はこういう扁額を出しているのですね。『利休亡魂(ぼうこん)』です。わざわざこういう言葉を扁額にして茶会を開きます。それは、秀吉は世を去り、利休と共に花見を愉しもうよという趣旨の茶会だったようです。“わび茶”というのは全て消えていくことを前提にして自分が死ぬべき時をしっかりと捉えています。それとともに、失ったものが全くなくなってしまったのでは無いという余韻があるのですね。だから利休さんがお客様をおもてなししてお帰りになった後に、自分が茶室に戻ってきて、お客様は何処まで行かれたかなということを思い起こしながら一服いただいたという逸話があります。だから“茶の湯”というのは余韻のある世界なのでしょうね。

■織部の緑はコンパッション

最後に織部の焼き物の中に、これはコピーですけども京都の地下鉄を掘っている時に、桃山時代のお茶碗屋さんにつかったのです。そこからこういう見事な十字模様が入った瀬戸黒の茶碗が出てきました。これはちょっと照りがあって好きじゃないのですが、本来の織部好みの茶碗は照りがあります。そして、織部の好みというところの緑ですね。緑にいろいろと入っているのです。それに志野釉薬を掛けたものもあります。これは志野に黒の釉薬です。桃山時代の特徴である志野の釉薬を掛けてあるものもあります。何故、織部がこの緑を愛でたのか？ こうした釉薬を使って焼けるようになったということもありますが、この志野と黒の茶碗を作った方は、この色を出すために無農薬で藁を作り灰にし、この緑の色を出すために土も多治見で採って作っているのです。多治見の陶芸家を育てる先生なのです。これは織部の釉薬の中では、今までに無かった一番綺麗な色です。何故、緑なのか、最近分かったのですが、聖書では憐れみ、優しさ、愛を表す色なのです。その代表がエメラルドですね。織部はこの色を愛したのだと思います。英語で言うと“コンパッション”ですね。そして、こういう文様が 16～17 世紀に流行した“辻か花”という着物に描かれている文様と一致しているのです。織部という人は、そういう不思議な人です。こちらが井戸茶碗です。このくらいの茶碗を自分の手に合うようにといて、十文字に割って継いだのも織部です。現存しています。何でそんなことをしたのか、城一つと茶碗が同じ価値を持っていたからです。金海では“猫掻き茶碗”とありますが、櫛目状の刻線模様があります。これは金海の茶碗屋で見つけてきた茶碗です。最後に申し述べたいことは、『三斎、織部見送りの礼状』です。これは、利休さんが秀吉から堺での塾居を申しつけられて淀川を下るときに、見送りに来ていた細川



忠興(三斎)と古田織部に送った手紙です。これは「松井文庫」という所にあるのですが、まさに利休の涙の手紙なのですね。古田織部に贈られた茶杓を『泪』と呼び、織部は共筒に漆を掛けて窓を開けてクルスのようにして大切に拝んでいたのです。細川三斎にも贈られているのですが、永青文庫でも特定ができないそうです。ですから、この時の証拠品は、これ一本だけです。このようなことを相対的に考えると、どうも織部はキリシタンであったと思えるのです。ある陶芸家はキリシタンだといい、ある方は違うと言っています。さあ、皆さんどちらですか。古田織部って何者？

私もこの年正月に松屋で開催された『古田織部展』に行きましたが、現代にも通用するデザインの数々でした。